

《 資 料 研 究 》

Русский Современник (1924)

西仲村 浩
秋 元 里 予
安 岡 治 子

1920年代のネップ下で生れた文芸ルネッサンスの端的な表現は、雑誌のめざましい活動に見られる。革命直後から1920年代初頭までの困難な時期に象徴主義の流れをくむ人々による文集《スキфы》(1917-18)や、ベールィの《Записки мечтателей》(1919-22)のような先駆的な活動があったことを忘れてはならない。《Красная новь》(1921-42)、《ЛЕФ》(1923-25)、《Печать и революция》(1921-30)は、1920年代の主流となった雑誌であるが、1924年に刊行された《Русский современник》は、ゴーリキーを筆頭におき、ザミャーチン、チーホノフ、チュコーフスキー、エフロスという編集陣の構成である。明らかに非党派的な立場に立とうとしたこの雑誌は、Сменовеховцы系の雑誌《Россия》(1922-25)とならんで、ソビエト文学史の中ではほとんど黙殺されているが、1920年代半ばの雰囲気をもっとも忠実に表わしている雑誌として検討する価値があろう。

筆頭編集者のゴーリキーは、この時期外国で暮しており、実質的な編集活動を行ったのは主としてザミャーチンであった。

ザミャーチンに関して言えば、彼は二〇年代の前半は創作よりも評論、批評、そして編集活動に多くの時間と労力を費している。彼が雑誌編集に加わったのは「芸術会館」、「現代の西欧」、そしてこの《Русский современник》である。彼にとって雑誌編集はその評論活動と同じように、文学の自律を守る闘いの一つであったと思われる。後になって亡命先のパリで二〇年代のモスクワとペテルブルクの文学環境の違いを述べた評論「モスクワ-ペテルブルク」(1933)を書いたとき、彼は両首都の雑誌の性格の違いにも触れ、モスクワの民主主義的な、官製の二つの文芸誌「クラスナヤ・ノーフ赤い処女地」と「ノーヴィ・ミール新世界」に対置して、西欧への窓であり続けたペテルブルクの二つの文芸誌「ソヴременный Запад現代の西欧」と《Русский современник》とを非党派的なものとして位置づける。そして後者について次のように書く。

「誌面に古い文学の全ての進歩的分子と最も才能のある若者とを統合した《ロシアの現代人》は、あの時代に、いくつかの文学上の共産主義グループの偏頗な、宗派的な批評と激しく論争する勇氣を持っていた唯一の雑誌だった。この雑誌は短期間、ほんの二年ほど、存在しただけだが、《ネップ時代のペテルブルクの文学路線》の最も典型的な記念碑の一つであり続けるだろう。」

ザミャーチンのこうした態度は当然党、プロレタリア文学系の批評家たちの反撃を呼び起こし、二十四年頃からザミャーチンへの攻撃が激しくなり（特に第一号に掲載された彼の短篇に対して——後述）、この雑誌もまた「十月」誌上で、革命と無縁の「国内亡命者」と同伴者作家から成る「文学の右翼を組織する試み」として激しく批難される。そして、雑誌の継続、復活のためのあらゆる試みにもかかわらず、事実上は経済的困難のために四号までで中断されてしまうのである。

第一号

全体は三部から成っており、第一部は「散文、詩、文学アルヒーフ」と題されている。

・散文

・ザミャーチン——「最も重要なことについての物語」

国内戦を題材にした作品だが、ザミャーチンが新しい文学の条件として提唱する自分の方法（アインシュタインと革命という二つの大変革によって時間と空間の固定的な関係が崩壊した現実を、「多くの平面の転位 **смещение плоскостей**」、幻想とビットとの結合によって表現する）を実験した作品である。

物語は三つの場面で展開するが、ナレーターである「私」は絶えず位置を変え、全ての「最も重要な」瞬間は「私」が体験し、一人称で書かれる。そして三つの場面はイメージと象徴によって結合され、古代からの歴史と現在の一瞬とが呼応し合う。

「私」はまず、明日羽化するためにさなぎとなって死ぬ運命にある毛虫である。

地上の場面では、一つの橋をめぐる二つの村が闘い、殺し合っている。相手方の指導者は革命の前はかつて同じ牢獄で暮らした同志であった。一方の男には母親がおり、もう一人には恋人がいる。やがてボリシェヴィキが勝利し、相手の指導者は捕えられるが、銃殺の前日、かつての友人は彼に自分を殺して逃げるように仄めかす。相手がそれに従わないため、友人は男に恋人と伴に牢獄で二人になれるよう計る。二人はそこで片方の死を前にして初めて結ばれる。

もう一つの場面は地球と衝突する運命にあり、酸素も残り少なくなった星である。住人は四人。母親。母の息子であり、今は夫である男。もう一人の女。もう一人の片わの兄弟が殺される。母はその経過を見ているだけである。

この作品の評価は批評家によって大きく異なっている。プロレタリア系の批評家からは革命に敵対的な作品として攻撃され、ゴーリキーはこれをアインシュタインの理論で頭で作られた難解な作品と評している。西欧においては、作家が新しい方法を試みたが失敗に終わった作品という見方から、文学の「非人間化」においてアンチ・ロマンの先駆と見、ザミャーチンの最高の作品と見る見方まで両極端に意見が分かれている。

・ゴーリキー——「回想より：1. 試みる者たち、2. おかしなこと、3. 庭師、4. 法律通、5. A. A. ブロック」

これらは前年1923年にゴーリキーが主宰してベルリンで発行されていた雑誌「^{ベセーダ}談話」に発表されたものである。ゴーリキーはまたこの号の「評論……」の部分にこの年の一月に死んだレーニンの回想「ヴラジーミル・レーニン」を書いている。これは彼が「人間」と題して書いた回想の短縮版であり、完全な形で発表されたのは1927年である。但し、ゴーリキーはこれには不満で30年になって手を入れている。

・レオニード・アンドレーエフ——「元老院の馬——一幕のボードビル」

この作品は編集者の註によると、「全ロシア中央執行委員会報」のNo.85に手違いで掲載されている。

帝政ローマ時代を舞台にした戯曲。皇帝カリグラの命で馬が元老院議員に選ばれ、元老院中が大騒ぎするという話である。

・レオーノフ——「ゴグリョフ市でA. П. コヴァートキンによってなされたいくつかのエピソードから成る手記」

地方のステップの田舎町に生まれ育った、文学や詩に関心を持つ主人公が、自分を捨てた恋人にあてた詩を書き、自分の町の些細な日常のでき事をエピソード風にしたという形式の様式化された作品。後になって外部の世界から忘れられた田舎町に革命の波がおし寄せてくると、主人公は自分の生きる意味を見失い、自分の家と仕事を捨て、ハト小屋に寝とまりしながら考え始め、

やがてどこかへ行ってしまふ。

革命前のゴーリキーの「オクローフ町」やレーミゾフ、ザミャーチンの作品の影響の窺える作品であり、初期のレオーノフの特徴であることばとスタイルへの関心の読みとれる、「様式化された散文」の典型的な一例である。

・ピリニャーク——「二つの短篇」

十七年十月のモスクワでの市街戦と、そこで「大地のために」整然と死に向かっている兵士たちを描いた「第一の短篇」と、農村近くの森で農民を組織して狼狩りをする人間たちを描いた「第二の短篇」から成り立っている作品。二つの短篇は「大地夫人——巨大な女」というイメージで統一され、作品の本当の主人公は兵士や普通の人間を平然と死や敵へ向かわせ、人間を獣的なものに変えてしまう農村のロシアの自然発生的な力、ロシアの大地である。

・バーベリ——「イヴァンたち（騎兵隊より）」（邦訳は「二人のイヴァン」）

後に「騎兵隊」のなかにまとめられる短篇は1923—1925年にオデッサ、モスクワの雑誌、新聞に発表されるが、これもその一つである。

。詩

・ソログープ，詩四篇。

「言葉は聞こえない，が，私にはわかる／…」

「私は自分でゲームの規則を定めた／…」

「苛酷な運命が荒れ狂っている／…」

「麻節が行く／…」

・アフマートヴァ，詩二篇。

「神の使いのあとを義人が歩いていた／…」

これは後に詩集《ANNO DOMINI》に聖書の詩「2. ロトの妻」として所収。

「月が雲のもやのなかで退屈して／…」

これも同じ詩集に「新年のバラッド」と題されて所収。

・クリューエフ——「殺しの現場での歌」

・アセーエフ——「スクリーンの女王」

「夜の秘密」「速さの記録」「機械工」の三部から成り立っている。

・アレクセイ・ヴァーギン——「悪意ある者，不敵な者，栗色の髪の者たち」

。文学アルヒーフ

・レフ・トルストイ——「シェイクスピアについて」

シェイクスピア研究者ライヒエル Reichel にあてたトルストイの1907年3月2～15日付の反論の手紙。

・チュッチェフ——「バイロン」

チュッチェフのアルヒーフのなかで新しく発見された1827～28年に書かれた詩。チュッチェフのバイロンへの興味を裏づけるもの。

・ドストエフスキー——手紙と創作ノート。

手紙はドストエフスキーの各時期の書簡，生活の特徴づけるものとして七通が註とともに掲載されている。創作ノートはノートページ（全集11巻 p. 248～252にあたるもの）のファクシミリと内容の解説が載せられている。

・ストラホフとA. マイコフのドストエフスキー宛ての手紙。

・クジマ・プルスコフ（A. K. トルストイ）

「詩とパロディ。1. 生の知恵, 2. 断片, 3. 神の牝牛, 4. 寓話, 5. コンマ」
プルトコフの作品のなかでA. K. トルストイの書いたことが確かめられたもの。

第二部は「評論, 展望, ビブリオグラフィー」と題され, 評論(映画, 文学, 芸術など)の他に, 書評が載せられている。書評ではC. モクリスキーの演劇史の理論に関する数冊の本の書評「演劇の歴史の最初の歩み」, そしてH. ゲージのB. A. ピピナの「チェルヌィシェフスキーの生涯における愛」という本の書評「チェルヌィシェフスキーの愛」が二つ大きく載せられたあと, 「文学の歴史と理論」「演劇」「絵画」「音楽」「文学作品」に分かれて書評が載せられている。評論, 書評の部分でフォルマリスタたちが同時代の文学作品について書いているのは非常に興味深い。評論は次のとおり。

・シクロフスキー——「映画の法則について」

初期の映画の発展の法則を, 特にチャップリンの映画をもとにして, 探り出そうとした評論。興味深いのは芸術における「約束事」の重要さから, 映画に大きな自由を与えるトーキーやカラー映画が必ずしも導入されないかも知れないと予想されていることである。

・チュコフスキー——「現代作家の肖像(A. トルストイ)」

「アエリタ」までのA. トルストイの作品の分析。チュコフスキーはトルストイの作家としての才能を深刻な思想, 革命の世界的な意義の表現には見ず, ロシア的な「幸福な, 健康な, 子供っぽい, 何も考えない」人物の創造のなかに見ている。

・エフロス——「観客の蜂起」

構成主義者やメイエルホルトの, 生活に有用な文学や劇場の舞台と観客の境界の消失を求める理論に対する批判。エフロスは文学や演劇をあくまで約束事の上に立つものと考え 実際の生活と芸術とを明確に区切ることを主張している。

・エイヘンバウム——「文学を待ちながら」

マルクス主義文学批評, プロレタリア文学理論の批判。エイヘンバウムはフォルマリズムとマルクス主義文学批評と称するコーガンとリヴォフ・ロガチェフスキー, トロツキー, 折衷的なゴルバチェフとヴォロンスキーの批評をいずれも確固とした理論的な立場がないものとして批判している。

・トウニャーノフ——「文学の今日」

同時代の主要な散文作品に関する文芸時評。

・ソフィヤ・パルノク——「パステルナークとその他の詩人」

マヤコフスキー, マンデリシュタム, ツヴェターエヴァ, アフマートヴァなどの詩人と比較したパステルナーク論。パルノクは同時代の多くの批評家と同じようにパステルナークの詩の奇妙さ, 「非民族的な」特徴を見出し, ここに詩人の現代性, 「現代との血縁関係」を見ている。

・H. プニーン——「レニングラードにおける《AXPP》の最初の展示会」

革命ロシア芸術家協会の最初の絵画の展示会の批評。

第三部は「パノプチクム」と題されているが, オスフリヤ・ズーエヴァが「註と思考のノート」と題して, 様々の本のなかに見出される奇妙な記述や奇妙なことばを捨い出して紹介している。

第二号

第一部

Б. パステルナーク

詩《出航 Отплыть》

詩《雄鶏 Петухи》 水は一晚中休む間もなく働いておりました／雨は朝まで亜麻仁油を燃やしておりました／ライラック色の屋根の下から湯気が立ち上り／鉢に入ったシチューのように大地は煙っています／露を振り落として草がとび起きる頃／一番鶏が高らかに鳴き／それから二番鶏がそれから皆が鳴く／あのひとときの僕の驚きを誰が僕に話せるでしょう／山々を呼び覚まし／闇に呼びかけ／雄鶏は変動を予言するのです／雨に大地に愛に——すべてにすべてに

詩《秋 Осень》 10月よ、君のせいで僕の女友達は怯えているよ／彼女等は君のせいで恐れ戦いている／歩道からアスターの花が姿を消すと／恐がるんだ 鎧戸の並ぶ舗装道路は／小さな手に雪を握り締めて／肺病が自分の胸を押える／彼女は拾い物を／肺の切れ端にくるもうという訳さ／みえるかい？ 彼女を追いかけて／つかまえて——多少強引でもいいから／そう、力づくで彼女から取り返しておくれよ／9月の遺していったブレスレットを

詩《飛行 Перелет》

アレクセイ・トルストイ

《イビクス Ибикс》

《Русский Современник》 IVまで連載。尚1958年の10巻本全集所収（《Положение Невзорова, или Ибикс》, А.Н. Толстой, Собрание сочинений в 10 томах. т. 3

輸送会社に勤務する主人公セミョーン・イワーノヴィッチ・ネヴゾーロフはジプシー女に金持ちになると占われた。その後彼自身が占うと死の徴イビクスが現れる。革命を背景に主人公が色々な偶然から古美術商やコサックの盗賊団の金を手に入れ、手練手管で危い橋を渡りながらも2大都市からハリコフ、オデッサへ逃げるところで第I部は終わる……。

С. エセーニン

詩《ならず者の恋 Любовь хулигана》 お前を見てるのは悲しいよ／とても辛く哀れだよ！／柳の葉の銅貨しか／お前と俺の9月にゃ残ってないなんて！／他の口唇がお前の体からぬくもりと戦きを奪っちゃった／まるで小雨がそぼ降るようだ／お前の死んだ心からは／でもそれが何だ！ そんな雨なんか恐くない／別の喜びが俺の前に現れたんだ／だって何も残ってないんだから／黄色い腐敗と大地のほかは／だって俺は自分の静かな人生や頬笑みさえ守り切れなかったんだから／まだほんの少ししか歩いてないのに／俺の通ってきた道は間違いだらけさ！／お笑い草の人生さ！ ちぐはぐな事ばかりやって！／これからもこんな調子なんだろうね／まるで墓場みたいに庭一面ぼろぼろの白樺の骨がころがっている／結局俺たちだって 花咲き終わり／盛りを過ぎりゃ 庭の客になる身さ／冬になれば花のないのが当り前／悲しむことはないんだよ／冷たくしないでおくれ／いい年して、なんて言わないでくれ／重い癩癩にかかっちゃって／俺の心はまるでもう黄色い骸骨みたいだよ／いつか故郷にいたころ／子供らしい夢を持っていたんだ／俺は金持ちになるんだ有名になるんだ／皆から愛されるようになるんだって思ってたんだ／そう、実際今俺は金持になった！ 金持ちになりすぎたくらいだ！／前はシルクハットを持ってたけど今じゃもうない／履き潰した流行の編上靴と／胸当てが一枚残ったきり／俺の名前の売れようだって同じこと／モスクワからパリの貧民まで／俺の名を聞きゃ皆うんざりだ／落書きやが

らくたと変わらないのさ／じゃあ愛はと言えば……。面白い物さ／お前はキスしてくれるけど口唇はブリキ板みたいなんだから／分ってるよ 俺の気持ちは熟れたけど／お前の気持は花開く事さえ知らない／俺は悲観するにはまだ早い／悲しみがあるうちは不幸じゃないんだから／おまえのブロンドの髪よりも美しい／若いハマアカザが塚の上にそよぐ／俺は再び故郷に戻って／若いハマアカザのそよぐ中／永遠に人知れず暮らしたい／そして子供の頃の夢を煙にしてみたい／そのかわり別の新しいことを夢みるんだ／大地や草には分らないこと／心が言葉で表わせないこと／人間には名付けようのないことを

レオニード・レオーノフ

Записки некоторых эпизодов, сделанные в г. Гоголеве А.П. Ковякиным.
第一号からの続き

ニコライ・アセーエフ

詩《闘牛 **Бык**》「皆は待っている——牛はいつ倒れるだろう？」「私もまた閃光のような拍手の中、息絶え、倒れるのだ」「プーシキンもまた同じように生き、歩き、倒れ、そして牛を毒づきながら人々がのろしのような拍手を浴びせる間、ずっと歌い続けていたのだ」「他人の運命を刃にかけ、一太刀食らわせるのにこれほど手頃な職業は他にない」という、72行からなる詩。全集（Н. Асеев, Собрание сочинений в 5 томах, 1963）には1927年に改作された稿が掲載されている。

ボリス・パステルナーク

《空路 **Воздушные пути**》（邦訳「空路」三木卓訳、現代の世界文学、ロシア短編22、集英社）

О. Манделиштуーム

詩《1924年1月1日》

В. Кавьерин

《樽 **Бочка**》ユーレイ・トゥィニャーノフに捧げられたSF小説。あらすじ——英国王立アカデミー正会員、数学者のレジナルドが死去した。彼は「ノースウェイ効外リトル・レイク湖畔の左側にある岩の中、ストーン・ロードから47歩のところ、45万ポンド相当の財宝が埋蔵されている」との遺書を残す。その裏には、 x 軸上に狐の一部を接している樽型の図と

$$\int = 2\pi \int_{x_0}^{x_1} y ds = 2\pi \int_{x_0}^{x_1} y d \times \sqrt{1 + \left(\frac{dy}{dx}\right)^2}$$
 という公式が書かれていた。父のマシ

ューしか見ないうちに遺書は葬儀の日に盗まれてしまう。盗んだのはもう一人の息子、今は泥棒に零落した元数学者のジョージであった。彼が仲間と組んで財宝探しに出かけて行くと洞窟の中で人の声がし、みればスティアフォース郷を前に、片方の頬髯の男が奇妙な因果律を論じている。ジョージはこの2人を仲間に加え、一番奥まで下りて行くと、そこには何もなくて、石を投げると木に当たったような音がするばかりだった。スティアフォース郷はジョージに出口を教えたと頼まれ、遺書の裏の公式を見せる事を条件に承諾する。公式をメモした彼は計算を続け、やがて次のような仮説を述べる。町は大きな樽の中にあり、その樽は12時間ごとにあるものの表面上

を半回転する。町の上に樽の隙間のある側がきていると町は昼であり、隙間がない側が上になると町は夜である。樽が回転するとき何故人間がひっくり返らないかといえば、それは樽が回転するその表面が強い電磁気を出し、町や人間を引っ張っているからである。ロンドンの町はこの樽の回転軸上にあり、彼等はそれに対して垂直に下りて樽の底に着いたのである——この仮説をもとにマシューは樽の中に閉じ込められている今の世界から新しい世界（彼はこれに大きな期待をかけている）への脱出するためダイナマイトで出口を作る。彼の予想は適中し、後戻りした仲間と裏切ろうとして殺された仲間を除く3人——マシューとジョージは片頬髯の紳士——は灰色の空が広がる新世界へ脱出する。しかし、樽が回転して回転の土台である表面に彼等のいる地点が接する前に上へ逃げなければ、押し潰されてしまう。必死で逃げたにも抱らず彼等の頭上にある黒い空は急速に増大し、やがてマシューと片頬髯の紳士が姿を消し、まもなく轟音もろともジョージも樽の下敷になる。

◇

B. ヴェイドレ

詩《2つの詩 Два стихотворения》

1. 「爺さん、悪いけど、あんた、そのしゃがれ声いつやめるんだい」「僕の弟は冬の間あんたが少しましになってくれるよう神様にお願いしてるよ」「神様、僕もお願いします。僕だって口唇をかめしめすぎて血を出しちゃったくらいなんだから」「この歌と安っぽい愛の涙を僕は神に捧げたのです」（要約）

2. 「僕の隣の席についた男、出っ腹ではげちゃびん」「あまり風呂にも入ってないし、あまり美しい食べ方でもない」「神様、僕には分かってるんです。僕がこの男よりもひどいってことは」「でも僕の人生はまだ長い、だから僕はちょっと考えてみることにします」（要約）

◇

ソフィヤ・フェドールチェンコ

詩《戦場の民 Народ на Войне》

《 Народ на Войне 》 II から抜粋

◇

ソフィヤ・パルノーク

詩《 Ни до кого, никому, никогда... 》

詩《 Кто разлюбляете плоть, хладеет... 》

詩《 Жизнь моя! Ломоть мой пресный! 》「我が人生！我が味気なきパンよ」「我がからだなきからだよ！」「耳なく声なき我がミューズよ！」「あれ程多くの火の穀粒を潰してできた我が日々の糧が」「かくもみすぼらしい黒いパンにすぎぬとは」「神よ！なんと幸いなのでしょう」「己れの魂を滅ぼすのは」「聖饗葡萄酒の盃を打ち捨て」「カスターアの詩の泉を飲むのは」（要約）

◇

B. Ж.

《ラスプーチンの思い出》

B. Ж. Мои воспоминания о Гр. Еф. Распутине 1914-1916 年からの抜粋。著者はラスプーチンに興味を持ち、怪僧の住所を探し出して訪ねて行く。好色なラスプーチンが若い女性の著者に面会した時の様子と婦人ばかりを集めた日曜の会合がルポされている。

————— ◇ —————
チェーホフの手紙（死後20周年）

1924年《Слово》社（ベルリン）から出版されたオリガ・クニッペル宛書簡集の抜粋。

————— ◇ —————
C. バルハートゥイ

《チェーホフと劇の検閲》（未公刊資料による） チェーホフは検閲と無関係であったという意見に反駁すべく、《街道にて》《熊》《イワーノフ》《森の精》《桜の園》の検閲に関する文書を引用している。

————— ◇ —————
B. モツザレーフスキー

《プーシキンとスターン》（未発表の文）

1828年《北方の花》誌に掲載するためプーシキンが手渡した原稿の内、デーリヴィクによって削除された部分——スターン「感傷旅行」の中の一部の意識——について。

————— ◇ —————
アブラム・エフロス

《プーシキンの絵》

プーシキンが原稿やノートの隅に描いた絵について。

————— ◇ —————
B. ホダセーヴィッチ

《キューピッドとヒュメーン》

1816年にプーシキンの書いた韻文による物語「キューピッドとヒュメーン」には情夫に対する共感と夫に対する軽蔑という中世的伝統から受け継がれた彼の特色が表われているが、結婚後、これは一変する。

第二部

B. シクロフスキー

《アンドレイ・ベールイ》

ベールイの新しい文学フォルマの試みと人智学について、「ベールイの散文は以前より良くなっている。しかしその中では新しいフォルマが完全に美的に理解されている。それは新しいロシア散文の中に入るだろう」「人智学に則して生きようとすれば、それは彼の個人的不幸になるだろう」と述べられている。

————— ◇ —————
A. スミルノーフ

《現代演劇の問題》

主にメイエルホリドの演劇について。

————— ◇ —————
アレクサンドル・ベヌア

《「芸術の世界」展について》

今回の展覧会の中心が半トーンの世界であること、この半トーンが“繊細さの心理”を表わし、同時代の荒削りな強烈さへの嗜好に反するものであるが、このピアニッシモこそ天才のみが生み出し得るものであることを強調しながら、真の芸術の理解者のみが本展覧会を理解するだろうと

ベヌアは述べている。



ザミャーチン

《今日的なものと現代的なものについて》

今日的とは政治体制におもねる一時的、一過的なものであり、現代的とは時代の真実を反映した永遠的なものである。例えば《オクチャーブリ》誌は時代を証言していない。現今の文学も赤裸々な真実を描こうとしない。しかし、文学は時代をありのままに描き、後の世代に伝えるべきである。——著者の主張はここにあり、このほか、《ネドラ》Ⅳ、《ナーシ・ドゥニー》Ⅳ、《クルーグ》Ⅲ、《ポール》Ⅲの各作品集から引用しながら、同時代の文学は概して終わりに苦しむ作品が多いことを述べている。



A. Γ.

《現代文学論争》

1924年1月、現代文学の代表的作家と批評家を集結させることを目的として生まれたロシア芸術史研究所言語芸術部の現代文学研究委員が2月から5月までの間に8回開いた作家の朗読とそれについての討議という形式による会議について。うち4回は芸術的散文の諸問題（ザミャーチン、A. トルストイ、エレンブルグ、シクロフスキーの自作の朗読）、2回は詩（H. チーホノフ、M. ヴォロシン）、残りの2回は批評論文の朗読と報告（トゥイニャーノフの現代散文についての論文とエイヘンバウムの批評についての論文の朗読と論議）に当てられた。散文についての論議の中心は大きなフォルマの衰退と新しいフォルマの探求という問題であった。



エヴゲーニー・ブラウド

《音楽とモスクワ》

新しいロシア音楽の4大作曲家ミャスコフスキー、クレイン、ロスラーヴェツ、アレクサンドロフについて。

第三号

この号も他の号と同じく、創作と文学資料にあてられる第一部と、論文等からなる第二部、それに巻末のビブリオグラフィーという構成になっている。

資料欄には、ブロークの《**Возмездие**》の原稿、論文、演劇および演劇プラン六篇が掲載され、ブロークの従弟にあたるゲオルギー・Π・ブロークと、ザミャーチンの回想がそれに附されている。

作品欄は、チーホノフ、マリーナ・ツヴェターエヴァ、ウラジーミル・ピヤスト、ニコライ・チュコフスキーの詩、アレクセイ・トルストイの連載物《**Ибикус**》、それにゴーリキーの小品「アネクドート」エルザ・トリオレの「タヒチ島にて」とピリニャークの短篇「流水」がのっている。トリオレの作品は、彼女のロシア語での最初の創作であるが、1930年代以降はフランス語の作家に転向した。

論文欄で目立つのは、エイヘンバウム（「ジャンルを求めて」）シクロフスキー（「同時代の人と同期の人」）などフォルマリストたちである。とは言っても、共に時事的な軽い文章で、シクロフスキーの文章は同時代作家たちの点描的批評である。イーゴリ・グラバーリの「ロシア亡

命の芸術」は、亡命芸術家たちの活動の詳細な報告である。革命後フィンランドに逃げたレーピンをやはり亡命芸術家の中に数えていて、当時の芸術・文化情況のきわめて生彩に富んだ叙述として見逃がせない文章である。またレオニード・グロスマンの「ドストエフスキーの一人の女友達」は、アポリナーリャ・スースロヴァについて書かれた文章である。

第四号

まず第I部の短篇から掲載順に見てゆく。

E. ザミャーチンの短篇は、『至福の高僧パムヴァについて、その優れた英智について、奇跡による多くの示現について、修道僧エラズムがいかに本復したかについて』という題名からも明らかなように、聖人伝のパロディである。この作品は1920年に書かれ、1922年ベルリンの《Петрополис》出版社からクストジェフの挿画入りで限定千部が出版された。

あら筋は、悪魔にとりつかれたエラズムが、自分でも気付かぬ内に僧院の雰囲気を乱し、彼の朗読する聖人伝や彼の描くイコンのために、何故か僧院中が異様な興奮の坩堝と化すが、高僧パムヴァの力で悪魔は祓われ、僧院に平和が戻るというものである。言葉の面でも、трапеза, отрок, ланита などの詩語、宗教語が多用されている。

ザミャーチンは、こうした聖人伝のパロディをもう一作残しているが、これらが何のために書かれたのか——単に聖人伝のテーマや形式に興味があったのか、或いは社会主義社会の諷刺として読まれるべきなのか——は、意見のわかれるところである。

K. フェージンの短篇『静寂』は、初出が本誌であり、ソコロフ＝ミキトフに献げられている。

作者がゴーリキー宛の手紙の中で言うように、これは『果樹園』（1920）に似たタイプの作品で、革命後の零落貴族の心理の移り変りを描いている。主人公は、荒廃した屋敷に閉じこもったまま、働くこともなく、かつての農奴たちに食べ物を分けてもらっている。そんな鬱屈した生活を送っていた主人公が、昔の恋人との再会をきっかけに、突如感情を激発させ、暴力的な行為に出る。彼は、公園の樹々にかかった夥しい鳥の巣を、狂ったように片端から叩き落とし、ついに一羽の鳥を叩き殺す。そして、このことで心の迷いがふっきれたかのように、彼は百姓と一緒に畑を耕やしにでかけるのである。

ゴーリキーは、この作品の価値を認め、特に簡潔で適確な文体を誉めたが、発表当時の一般の評価は、過去のテーマと文体で書かれた時代遅れの作品ということで、低かった。

B. フレーブニコフの『Есир』は、1916～1918年に書かれ、本誌に初めて発表されたものであるが、発表に当りテキストの正字法を統一したのはヴィノクールであるという註がついている。

“Есир”とは、カルムイク語で捕虜、奴隷を意味する。これは、十七世紀、ステンカ・ラージンの時代、カスピ海の島に住む漁師がカルムイク人の奴隷となり、インドに連れて行かれ、そこで放浪生活をする物語である。そこで彼は、ヒンズー教徒やシク教徒の生活に触れ、仏像や寺院に囲まれて暮らすうちに、ある種の悟りを開いたかに見えるが、五年程たった頃、望郷の念にかられて生れ故郷へ戻る。しかしそこには彼を待っているものは何もなく、彼はまた何処へかと立ち去ってゆく。

この短篇は、本誌の第二部でヴィノクールも指摘しているように難解な **заумный язык** ではなく、明解で簡潔なプーシキンを思わせる文体で書かれている。また、フレーブニコフの東洋思想への興味が現われている点でも、この作品は注目されるべきであろう。

B. リージンの短篇『雄牛岬』は、おそらく初出は本誌であり、1925年に出版された抒情的な短篇集『北風』に所収されているものと思われる。

舞台は白海の小島で、そこには灯台守、電信技手、機械技師など僅かな人々が暮らしている。灯台守は十二年前、若くておとなしい妻をこの島に連れて来た。機械技師にも妻がいるが、ある時海鳥の卵を採ろうとして崖から落ちて死んでしまう。電信技手は一人者で、半年遅れの新聞を購読し、まだ陸地の人間の生活を続けている。

灯台守の妻が十二年ぶりに里帰りする。彼女は、島に来て以来初めて外の生活に触れ、連絡船の船長シェフツォフにも声をかけられる。島に帰ると、今までどおりの単調な生活が始まるが、彼女の心は三十才にして初めて揺らぎ出し、翌年また連絡船でやってきたシェフツォフに再会すると、すっかり理性を失ってしまう。彼女は“まぬけのニコルシャ”と呼ばれる労務者と自暴自棄的な情事を重ね、最後はそのニコルシャに殺される。

作品の主題は、人妻の不倫を描くことではない。北の最果ての四季を背景に、外界から切り放された島の人々の人生が、淡々とした青白い光に包まれたような独特の雰囲気醸し出している。文体としては **В эту ночь родился новый год, в эту ночь родилась новая жизнь, новая жизнь была побегом от телеграфиста.**

など、たたみかけるように同じフレーズが繰り返されるのが目立つ。

Л. ドビッチンの『リズとの出会い』は、初出が本誌であり、ドビッチンはこの作品で作家としての第一歩を踏み出した。これは、僅か五頁の小品で、ほとんど筋らしい筋はないが、革命後の田舎を舞台に、ペテルブルグの華麗な生活の思い出にふけり、体制が再び変ることを夢見ている婦人は、労働者たちを内心では軽蔑しながら、革命に共感したふりをして昇進をねらう俗物などの姿が描かれている。

第I部に掲載されている詩は、下記のとおりである。

П. Антокольский "Запад" / В. Ходасевич "An Mariechen", "Окна во двор", "Уж лучше бы--я еле смею..." / М. Герасимов "Березка" / В. Кириллов "Звездный рейс" / В. Хлебников "Воспоминания", "Суэ" Адалис "Смерть", "Поэт" / М. Комиссарова "В разлуке губы имя берегут...", "Скажи слепому спутнику земли..."

第I部の最後は、Литературный архив として、Л. Андреевの家族宛の書簡が載せられている。序文を書いているチュコフスキーによれば、アンドレーエフの家族は1920年頃に相前後してほとんどが亡くなり、ただ一人残された妹の Римма Ник. Оль から編集部は龐大な архив を受け取り、その一部を発表した。

ここに載せられたのは、1904~1918年までに母、弟妹たちに出された28通の書簡である。

アンドレーエフは、家族を大切に非常に愛していたが、母親に対する感情は特別のものであった。母宛の書簡は優しい愛情に満ち、ほとんど恋文とも言えるほどのものである。兄弟の中では特にパーヴェルと末弟アンドレイと親しかったが、アンドレイに対しては父親のような感情を持っていたらしく、文面にもそれが現われている。

第II部の最初を飾るのは、М. Гóрикийの『С. А. Толстаяについて』という文である。(全集第十六巻所収)この雑誌が初出である。文中「亡きトルストイ夫人を中傷するためだけに書かれたチュルトコフの『トルストイの家出』を読んで偉大なトルストイの唯一の親友であった夫人について一言述べたい」と書かれている。

この中でゴーリキーは、自分はトルストイ夫人について公平に語ることができると述べている。というのも、彼自身、夫人が好きではなかったし、夫人の方も彼に好感を持っていなかったからだというのである。ゴーリキーはトルストイに近づくすべての人に対する夫人の異常なまでの嫉妬深さを認めながらも、“信奉者”“弟子”という名の様々なしつこいとり巻きから夫を守るのは、彼女しかいなかった、と述べている。ガスプラで重病のトルストイを囲んで、親戚じゅうが集まった数ヶ月間、夫人を見守ったゴーリキーは、夫人がたった一人でてきばきとあらゆる雑事を片付け、夫のみならず大家族の全員がいかに彼女を頼りにしていたかを証言している。1905年の革命当時、領地を守るために、他の多くの地主同様夫人がカフカス人を雇ったことは、世間に最も激しく糾弾されたが、これについてもゴーリキーは、夫人にとって夫の生活を守ることは当然だったと弁護している。

この文章は、当時すでに常識になりかけていた、トルストイ夫人をクサンチッペになぞられる一方的な悪妻説に異を立てるものとして注目される。

K. チュコフスキーの『賢い戯言』は、後に発表された『二才から五才まで』（1928）の第四章に、同じ題名で少し肉付けされて載せられている。

チュコフスキーはまず、ロシアの子供の民話の中には、馬の代りに鶏や猫や豚に乗るなど、わざと規範からはずれたがる傾向があることを指摘する。これは何も乗り物だけに限らず、「船が野原を走り、海の中で火が燃える」ような *небывальщина*（作り話）や、「犬の下から門が吠える」といった *игра в обмолвку*（言い違い遊び）にも見られる。英国の *topsy-turvy rhymes*（あべこべ歌）も同様なものであるが、子供たちは正しい言い回しをふまえた上で、自分の知力を確認するために、こうした言葉遊びをするのである。子供たちに、いかに物事を分類し体系化する能力があるかは、五才までに母国語の複雑な文法を習得してしまうことによっても明らかであろう。こうした能力があるからこそ“でたらめ歌”や“あべこべ歌”が知的な遊びとして子供たちに人気があるのだ。

しかし昔から教育者たちは、真の意味で子供らしいこうした民謡を嫌い、大人の感覚で作った童話をおしつけてきた。革命後のソ連でも、教育者たちが童話作家に求めているのは、新しい社会に適合する新しいテーマばかりで、形式は全く無視されているが、立派なテーマも、生き生きした感情のこもった形式によってこそ生かされるのではないか。

以上のことがこの一文には書かれているのだが、ここにはチュコフスキーのすべてての要素——童話作家として、詩の研究家として、フォルマリストとして、外国文学の翻訳家として——が現われている。

Ю. フロロフの『条件反射の方法と自然科学におけるその意義』は題名の示すとおりパヴロフの条件反射の理論を紹介する文である。

フロロフはまず、この理論を理解する上で必要となる基礎的な背景を説明した後、条件反射についてわかり易く解説してゆく。それは、犬を使った有名な実験方法から始まり、条件反射の形成、消去、分化、汎化などを実に詳しく追ってゆき、最後には大脳生理学との関係にまで触れるもので、専門的なものではないが純粋な科学論文である。

こういう論文が "*Русский современник*" に載せられたことは、一見奇妙であるが、フロロフも前文で述べているように、当時パヴロフの理論がそれだけ大きな論議をよび、一般の興味の対象となっていたわけであろう。

Ю. トゥイニャーノフの現代詩人論《Промежуток》は、四章が書き加えられ、同題で1929年《Прибой》出版から発表された。ただし、В. Казин についての章は削除された。この《Промежуток》は、最近セリカ書房から出版された『ロシア・フォルマリズム文学論集2』に『週渡期の詩人たち』として翻訳されているので参照されたい。

Г. ヴィノクルの『フレーブニコフ』は、従来のフレーブニコフ論を覆すものと言えよう。ヴィノクルはまず、ロシア未来派の伝統はフレーブニコフのものではなく、マヤコフスキーに発するものだと述べている。確かにマヤコフスキー自身は、フレーブニコフを自らの師とみなしているが、マヤコフスキーは、フレーブニコフの外面的な手法を身に付けると、すぐにその枠を越えてしまった。内容的にも形式的にもフレーブニコフ流の詩を書くのは、Н. Асеев だけである。

次に、フレーブニコフの詩人としての真価は、一般にフレーブニコフを語るとき必ず持ち出される "заумный язык" だの "самовитое слово" といったものにあるのではなく、むしろ数は少ないが、それだけに本物の詩 "Иранская песня" や "Сельская очарованность" の中にこそ彼の詩的才能がきらめいている。これらの詩は、高雅で明解で清らかな言葉で書かれた“古典的な”ともいうべきものであり、プーシキンを思わせる。これは、散文“Есир”などについても言えることである。

ここまで述べてきたヴィノクルは、学者（おそらくヤコブソンを指すものと思われる）にとっては "заумь" や "смехачи" を科学的に研究することが必要だろうが、我々は、人間的に詩を読むべきだという言葉でこの文を結んでいる。

第Ⅱ部にも書簡が載せられている。これは、В. Блюэрソフから . Пелтсоフへ宛てた1899～1906年までの八通の書簡である。Пелтсоフは初期象徴派の代表者の一人だが、БлюэрソフはПелтсоフ宛の書簡が多く、1927年に書簡集としてまとめられた。

本誌に掲載されているものの中では、バラトウインスキー、ナドソン、ソログープ、ギッピウスなどについて論じられている。

第Ⅱ部を締めくくるのは、『ペレグド達へ—— "Русский современник" の編集部より』という文である。

この文は、レスコフの『うさぎの逃げ場』の主人公 Оноприй Опанасович Перегуд の紹介から始まる。Перегуд は、なんとか反体制の危険人物を見つけ出して密告してやろうと思ひ、ある不審な人物の言った言葉を書き取る。ところがそれは、なんと福音書の言葉だった。レスコフの Перегуд は作品の中で死んだはずなのに、実は現在も名を変えて活躍している。

こうした書き出しで始まるこの文は "Русский современник" に載ったソログープ、パステルナーク、アフマトワ等の詩を、反革命的と決めつけ、"Русский современник" の背後には外国資本があると非難した批評家たち（Розенталь, Лелевич, Родов 等）を Перегуд になぞらえ、徹底的に茶化している。

プーシキンの恋愛抒情詩まで持ち出して、Перегуд 達は今にこんな詩さえ反革命的だと言い出すのではないかと結んでいるこの文は、全体に小気味よい諷刺に貫かれ、極めて威勢が良いように見えるが、その実 "Русский современник" に対する風当たりがかなり強かったことを物語りもいる。

第Ⅱ部の後には Библиография があり、さらにその後、様々な出版物、印刷物に見ら

れる奇妙な表現、間違った言い回しなどを集めた **Паноптикум** と称する頁があり、最後に編集部への手紙が三通載せられている。二通は、第三号に載ったトマシェフスキーによるホダセーヴィチの本の批評をめぐった両者の手紙で、もう一通は、ピリニャークのものである。

"Русский современник" は、この第四号で廃刊となったが、第五号も出す予定だったらしく、予告が出ている。最後にその予告の目次を紹介しておく。

- Художественная проза: М. Горький "Голубая жизнь", А. Толстой "Ибикус", Е. Замятин "Бич божий", С.Н. Сергеев-Ценский "Невидимый", М. Бабель "Рассказы", Л. Добычин "Учительница", К. Станиславский "Американские впечатления", Г. Шторы "Многобит"
- Стихотворения: А. Ахматовой, М. Зенкевича, Б. Пастернака, Вс. Рождественского, М. Шкапской и др.
- Литературный архив: Н.А. Некрасов "Разлив", К. Прутков
Неизданные стихи
- Статьи: Н. Лазарева, Ю. Тынянова, Н. Пунина, К. Чуковского, Б. Эйхенбаума, Г. Блока, А. Долинина
- Из прошлого: А. Кони "Дело Веры Засулич"

< 附 記 >

川 端 香男里

資料研究という題をつけたが、私の演習のレポートが骨子となったものである。冒頭にもものべておいたように、1924年という時代を知る上でも重要な文献である。

レーニン図書館でとったマイクロフィルムから起こした読みにくいコピーで一生懸命読んでくれた三人の大学院生の諸君に感謝したい。